

『学習院史学』32号正誤表

○裏表紙

鶴飼論文題名

Treaty → Convention in 1864

○p. 56 L. 8

原研究ノート注

(18)「裔入宋 → (18)「裔然入宋

## 『參天台五臺山記』にみえる寒山説話について

原 美和子

## はじめに

寒山・拾得・豊干の三人は、特に禅宗との関わりにおいて、画題や詩文中にとりあげられてよく知られている<sup>1)</sup>。また、寒山の三百余首の詩を収めた『寒山詩』(拾得・豊干の詩を併せたものは『三隠詩集』と呼ばれることもある)が今に伝えられている。寒山・拾得・豊干についての伝は、閻丘胤が書いたとされる「寒山子詩集序」を始め『宋高僧伝』等諸書に見られ、説話として発展し、受け入れられてきたといえる。その最も古い形は『寒山詩』に付せられた閻丘胤の序(寒山子詩集序)であり、それに続いては同詩集の後ろに付け加えられた「豊干禪師録」・「拾得録」に求められる<sup>2)</sup>という<sup>3)</sup>。

寒山・拾得・豊干の実像と実在性、『寒山詩』及び寒山説話の成立の事情に関しては、『寒山詩』に収録されている詩や諸書の説話の内容の検討を通じて、諸先学の詳細な研究があるが、なお不明な点が多い<sup>4)</sup>ようである。それらについて今ここで改めて考察する能力を持たないが、『寒山詩』及び寒山説話の成立に深く関わっている

閻丘胤に関して、これまでとりあげられることがなかった史料があり、検討の価値があると思われるので、小稿ではその紹介と共に、『寒山詩』・寒山説話の日本伝来の問題についても若干触れてみたいと思う。

註 小稿では原則として中国の年号を使用し、必要と思われる場合には( )内に日本の年号を示すこととする。

## 一

「寒山子詩集序」によれば、その著者閻丘胤は「朝議大夫使持節台州諸軍事守刺史上柱国賜緋魚袋」という肩書をもつ人物で、台州刺史在任中、豊干と天台山国清寺に居た寒山・拾得に相い見え、彼らが跡を絶った後、国清寺の僧道翹<sup>5)</sup>に寒山の詩を集めさせ、その詩集を編纂したのだという。しかし、旧新唐書をはじめとする諸史料に、『寒山詩』・寒山説話との関連以外で、台州刺史閻丘胤の名が確認できないことと、「寒山子詩集序」の文章が閻丘胤ほどの肩書を持つ人物のものとしてははなはだ稚拙であって、到底本人が書いた

ものとは思われぬことなどを理由に、閩丘胤の實在は疑われてきた。<sup>(6)</sup>

ところで、南宋嘉定癸未年(一二二三)に修された台州の地方志『嘉定赤城志』巻八、秩官門一、歴代郡守、唐の正観(貞観)年中に、

十六年 閩邱下一字  
太祖御諱

(中略)

二十一年 鄭神拳

とあり、貞観十六年(六四二)から同二十年(六四六)までの台州刺史として、閩丘胤の名が見えるのである。この史料は、『寒山詩』・寒山説話とは全く関係のないところに台州刺史閩丘胤の名が確認できるものとして、注目されよう。残念ながら現在のところ他史料が見いだせないため、閩丘胤についてこれ以上知ることはできないが、『嘉定赤城志』に従えば、『寒山子詩集序』を書いたとされる閩丘胤は、実際に貞観十六年から二十年までの台州刺史であったこととなる。

## 二

さて、いま一度寒山説話に目を向けてみると、寒山・拾得・豊干の實在性を疑わせる理由の一つに、寒山等の現れる時代が諸伝によって区々であることが指摘されている。<sup>(10)</sup>そこで、諸書の寒山等の伝を見直してみると、寒山・拾得・豊干が国清寺に居たとされる時期ひいては閩丘胤が彼らに出会った時期については、貞観という年号を示すものが多いことに気付く。つまり、「拾得録」には、

豊干禪師寒山拾得者在唐太宗貞観年中相次垂跡於国清寺。

とあり、志南の『天台山国清禪寺三隱集記』(一一八九年成立)には、豊干禪師唐貞観初居天台国清寺。

とある。また、『嘉定赤城志』(一二三三年成立)巻三十五、人物門四には、

正観中閩邱守嘗問豊干。天台有何賢聖。答云(後略)

とある。以上の三史料は「貞観年中」・「正観初」・「正観中」とあるのみでくわしい年記は示さないが、『仏祖統紀』(一二六九年成立)巻三十九では正観七年(六三三)条に、『釈氏稽古略』(一三五四年成立)巻三では貞観十七年(六四三)条に、寒山等の伝と彼らと閩丘胤の出会いの話が収録している。<sup>(11)</sup>「拾得録」は最も古い形の寒山説話を伝える史料の一つであるので別に考えなければならぬが、これらの諸書に先だって、閩丘胤が豊干に会った年を「貞観十七年」と明記しているのが、熙寧五年(延久四年、一〇七二)に入宋した僧成尋の日記『參天台五臺山記』(以下、『參記』と略称)である。<sup>(12)</sup>

熙寧五年三月に宋商人の船に乗り込み渡海した成尋は、杭州から天台山に向い、五月十三日に国清寺に到着している。翌十四日には寺内の諸院諸堂を巡って、阿弥陀・文殊・普賢の化現とされる豊干・寒山・拾得の像を祀った三賢院にも参礼した。それに関連して同日条に寒山等の伝を収載しているのである。長文にわたるが以下に引用する。<sup>(13)</sup>

<sup>(14)</sup>

<sup>(15)</sup>

<sup>(16)</sup>

三賢唐太宗貞観年中相次垂迹於国清寺。豊干禪師先泊於寺大感西北隅庵居。乃一日遊松逕。赤城道側見一子。而啼。可年十歲。問無家亦無姓。師引歸寺庫收養。号为拾得。後有一賢子。從寒山而

来。遂号爲寒山子。貞觀十七年朝議大夫使節台州諸軍事守刺史上柱國賜緋魚袋閻丘胤。問豐干禪師曰。未審彼地當有何賢堪爲師仰。師曰。見之不識。識之不見。若欲見之不得取相乃可見之。寒山文殊。遁迹国清。捨得普賢。狀如貧子。刺史遂至国清寺。厨中竈前見二人向火火笑。刺史礼拜。二人連声喝刺史自相把手呵呵大笑叫喚乃云。豐干饒舌饒舌。弥陀不識。礼我何爲。二人乃把手出寺急走而去。二人更不返寺。刺史至豐干禪師院乃開房。唯見虎跡。乃問僧美德道翹。禪師在日有何行業。僧曰。豐干在日唯功吞米供養。夜乃唱歌自樂。豐干詩。余自來天台。凡經幾万廻。一身如雲水。悠悠任去來。委旨在伝録。

右を要約すると、以下のようになる。寒山・拾得・豊干の三人は、唐の太宗の貞觀年中に相次いで国清寺に垂迹した。豊干は寺の大蔵の西北隅に庵居していたが、ある時赤城の道において泣いている一子をみつめた。家も姓もないのでつれ帰って育てた。子は、拾得と号したという。また、寒巖より来た一賢子があり、それは寒山子と号したという。貞觀十七年に台州刺史閻丘胤が豊干に、天台に師と仰ぐべき賢者がいるか尋ねたところ、豊干は、その姿かたちによって見るとその人を見抜くことができないと注意した上で、文殊と普賢の応化である寒山と拾得の名を告げた。そこで閻丘胤は国清寺に至り、厨の竈の前で火に向かって大笑している二人をみつつけ礼拝したところ、二人は刺史を喝し呵呵と大笑し叫喚して「豊干のおしゃべりめ。阿弥陀さまさえ見分けがつけられないのに、おれたちを礼して何になる。」と言って、寺から走り出たまま二度と戻ら

なかった。さらに閻丘胤は豊干の房に行ってみたところ、そこには虎の足跡があるのみであったという。寺の僧道翹に豊干の在りし日の様子を聞いたところ、豊干は日々米を舂いて供養することをつとめとし、夜は歌を歌って楽しんでたということであった。(以下、豊干の詩)。

これを現在伝わる諸書の寒山説話と比較してみると、傍線Aの部分は閻丘胤の「寒山子詩集序」、Bの部分は「豊干禪師録」、Cは「拾得録」の一部分とそれぞれ一致している。従って成尋が、現在『寒山詩』に付されている「寒山子詩集序」・「豊干禪師録」・「拾得録」と概ね同内容の史料を手にして、『参記』に引き写したことは、ほぼ間違いないと思われる。つまり、『参記』は最も原初的な寒山説話を収録していることになるのである。ただし、現在伝わる「寒山子詩集序」及び「豊干禪師録」と「拾得録」さらに、現在確認できる諸書の寒山説話のうち成尋の入宋以前に成立していて成尋が参考にし得たと考えられるものいずれにも、「貞觀十七年」という年記だけは記載されていないのである。<sup>16)</sup>成尋の引用の最後には「委旨在伝録。」とあって、「伝録」(伝記、記録の類というほどの意味である)かを参照したことが窺える。これが如何なるものか、いま確定することはできないが、「貞觀十七年」はそれに記されていたものであろう。いずれにしても、国清寺においてこのとき成尋が参照した史料には、年記が明記されていたのだと考えられ、それが成尋によって書き留められ、今に伝えられたのではないだろうか。

「貞觀十七年」という年記は、前節で示した『嘉定赤城志』の閻丘胤の台州刺史任期中であって、矛盾はない。特に、閻丘胤と豊干

の出会った年として「貞観十七年」を明記している点から、『参記』の記事は注目できよう。そこで次に、成尋が何に拠ってこの年記を記述したのかについて考えてみたい。

## 三

さて、成尋は入宋に際して先人の渡航記録や現地に関する参考書の類を数多く持参し、旅行中関連史料を参照しながら自らの日記にも関連の箇所を書き写している様子は、『参記』の所々から知られる。また、成尋が先人として跡を慕う一人である齋然が、太平興国八年(永観元年、九八三)九月に天台山において豊干・寒山・拾得三賢の旧隠を訪ねているという事実も確認できる。これらの点から、寒山説話も成尋が日本から携帯していった書物から引用された可能性がない訳ではない。しかし、齋然の事例以外、成尋入宋以前の日本の貴族社会、仏教界、文学界において、『寒山詩』または寒山説話が人々の注意をひいていたことを窺わせる史料は見当たらない。成尋がかなり長文にわたって寒山等の話を引用していることや、『寒山詩』及び寒山説話の成立時期の問題とも考え併せて、この頃に天台山国清寺で伝えられていた寒山・拾得・豊干に関する話を、成尋が新たに採録したと考えた方が自然ではないかと思われる。成尋が寒山等の話を書き写した数日後の『参記』第一、熙寧五年(延久四年、一〇七二)五月二十二日条には、

未時禹珪捨与寒山子詩一帖。中心為悅。

とあって、成尋は国清寺の僧禹珪から『寒山詩』一帖を贈られている。そして同書第六、熙寧六年正月二十三日条に、

(前略)寒山詩一帖・曆一卷進上治部卿殿。且預惟観了。永嘉集一卷・証道歌注一帖・泗州大師伝二卷・広清凉伝三帖・古清凉山伝二卷・入唐日記八卷送石蔵経藏。

とあり、『寒山詩』一帖は、熙寧六年六月に日本に向けて帰帆した成尋の弟子等に託されて、成尋の母方の従兄弟源隆俊(治部卿殿)の手に渡ったものと考えられる。そして上述したように、最も古い形の寒山説話を、他の史料には見られない「貞観十七年」という年号を明記して採録した『参記』(入唐日記八卷)も、同時に弟子たちの手で日本に持ち帰られ、成尋が寺主をつとめていた大雲寺の経藏に納められる予定であったことが知られるのである。さらに言えば、寒山等の伝も収める、宋代の代表的な禅宗史伝『景德伝灯録』も成尋が日本に伝えているのである。<sup>(23)</sup>

後に禅宗において広く受け入れられた『寒山詩』と寒山・拾得・豊干の話は、このようにして成尋によって伝えられていたことが確認できるのであるが、禅林において受容される以前に、貴族社会、仏教界、文学界において受け入れられ流布された形跡は、『通憲入道蔵書目録』として知られる平安時代末期の目録中に「寒山詩一帖」と見える事例以外は見いだせない。日本における『寒山詩』と寒山説話の本格的な受容と展開は、禅宗の普及を待たなければならなかったようである。<sup>(25)</sup>

## おわりに

以上の史料から、『寒山詩』と寒山説話の成立に深く関わっているにもかかわらず、従来その実在が疑われていた台州刺史閻丘胤が、

実在の人物であつたらしいこと、その台州刺史であつた時期は貞観十六年から二十年の間であつたこと、そして、閩丘胤が豊干に会つた年は貞観十七年であつたとの伝が成尋入宋の頃の天台山にあつたことが、確認できたと思われる。

もちろん、右を根拠に閩丘胤が実在の人物であり、彼が豊干等に出会つたとされる年が知られたと仮定したとしても、すぐに『寒山詩』と『寒山子詩集序』の成立を貞観年間に定めることができるわけではない。寒山の詩とその説話は別々のものと考えざるべきで、寒山の詩が作られた後、その作者を説話化した寒山説話が成立したことが指摘されていること、閩丘胤の書いたとされる序は閩丘胤ほどの肩書を持った人物の文章としては稚拙で、本人が書いたものとは思われないことが一致して指摘されているからである。この見解に従えば、『寒山子詩集序』は、貞観年間に台州刺史であつた閩丘胤に仮託して書かれたものと考えられ、その詩集も閩丘胤の編纂に仮託されたものとならう。

しかし上述したところにより、閩丘胤が全くの創作上の人物でないことが認められれば、今後『寒山詩』ならびに寒山説話の閩丘胤仮託説についても改めて考察する必要があるのではないかと考えている。

## 註

- (1) 朝倉尚「四睡」考(『禅林の文学』(清文堂出版、一九八五年)所収)、金沢弘「寒山拾得図」(『古美術』二十七、一九六九年九月)、入矢義高「寒山 中国詩人選集5」(岩波書店、一九五八年)「入矢A書、同「寒山詩管窺」(『東方学報』(京都)二十八、一九五八年三月)「入矢B論文、等参照。

(2) 成立時期が早い主なものは、『宋高僧伝』(九八七年成立)巻十九、『景德伝灯録』(一〇〇四年上巻)巻二十七、志南の『天台山国清禅寺三隱集記』(一一八九年成立、『嘉定赤城志』(一二三三年成立)巻三十五、人物門四、『仏祖統紀』(一二六九年成立)巻三十九、『仏祖歴代通載』(一二四四年序)巻十五、『釈氏稽古略』(一二五四年成立)巻三、等である。また、上述諸書の寒山説話とは系譜を異にするものが、『太平広記』巻五十五所引の「仙伝拾遺」(杜光庭八五〇〜九三三)著中に見える。それによれば、『寒山詩』の編者であり序を書いたのは唐末武宗(在位八四〇〜八四六)の頃の天台山の道士徐靈府であるという。

(3) 津田左右吉「寒山詩と寒山拾得の説話」(『シナ仏教の研究』(岩波書店一九五七年)所収)四八一〜四八七頁、前掲註(1)「入矢A書七〜八頁、入谷仙介・松村昂「寒山詩 禅の語録13」(筑摩書房、一九七〇年)四八四頁。

(4) 主なものは、太田佛蔵「寒山詩」(岩波文庫、一九三四年)、津田前掲註(3)論文、入矢義高「王梵志について」上・下(『中国文学報』三・四、一九五五年十月・一九五六年四月)「入矢C論文(上・下)、前掲註(1)「入矢A書、前掲註(1)「入矢B論文、同「寒山」その人と詩」(『古美術』二十七、一九六九年九月)「入矢D論文、木村英一「寒山詩について」(『日本中国学会報』十三、一九六一年十月)、入谷・松村前掲註(3)書、等である。

(5) 唐代の文人李邕(六七八〜七四七)の著した「国清寺碑并序」(『李北海集』)に、国清寺の寺主道超という名が見えるが、「寒山子詩集序」の道超との関わりは不明である。

(6) 特に、我が国の諸研究において疑われてきた。太田前掲註(4)書三頁、津田前掲註(3)論文四八三頁、前掲註(1)「入矢A書八〜九頁、前掲註(4)「入矢C論文(下)五十四〜五十五頁、前掲註(4)「入矢D論文四十六頁、入谷・松村前掲註(3)書七〜八・五〇頁、等参照。一方中国において出版された、郁賢皓「唐刺史考4」(江蘇古籍出版社、一九八七年)巻一四四、徐光大「寒山子詩校注」(中華書局香港分局・陝西人民出版社、一九九一

年)一―二頁等においては、後述する『嘉定赤城志』を引いて台州刺史閻丘胤を確認している。

(7) 宋仁宗の諱慎を避けて、貞字は正字に改められた。『史諱举例』卷八 宋諱例の項参照。

(8) 『統高僧伝』卷二十五の釈智嚴(五七七―六五四)伝に「麗州刺史閻丘胤」とあり、同人のことは『仏祖統紀』卷三十九の武徳四年(六二二)条にも見えるが、「寒山子詩集序」の著者とされる閻丘胤とは別人であろうと思える。

(9) 青木敦氏は、『宋会要輯稿』の黜降官と宋代編纂の地方志の長官等の罷免事例を対照させた際、他の地方志題名記が政治的事情などに左右されずに罷免の事実を忠実に伝える信頼できる史料であるのに対して、台州の『嘉定赤城志』の題名記は罷免記事等に関して問題をほらんでいることを指摘しておられるので、『宋会要』職官六四―七五「黜降官」について、『史学雑誌』一〇二―一七、一九九三年七月)、唐代の刺史に關しても『嘉定赤城志』の題名記は注意を要すると思われる。

例えば、田珍が、大中十二年(八五八)に裴謨に代わって台州刺史になったと記録する嚴修睦(小野勝年「入唐求法行歴の研究」下[法蔵館、一九八三年]三三―三五八―三七六頁)の名は『嘉定赤城志』には見えず、裴謨の後、大中十三年からの刺史としては李師望の名が記されている。また、最澄との関わりが知られる台州刺史陸淳は、刺史として貞元二十一年(八〇五)二月に判印と憑拠を出しているが(伝教大師將來台州録、小野同上書三六六頁)、その名も『嘉定赤城志』には見えない。

(10) 太田前掲註(4)書三―四頁、津田前掲註(3)論文四八三頁、前掲註(1)入矢A書七―八頁、前掲註(4)入矢C論文(下)四十四―五十三―五十五頁、木村前掲註(4)論文五十一―六十八頁、入谷・松村前掲註(3)書四八四―四八五頁。

(11) 前節で示した『嘉定赤城志』の閻丘胤の台州刺史在任期(貞觀十六年―二十年)と比較して考えた場合、『天台山国清禪寺三隱集記』の「正觀

初」は、豊千が国清寺に居た時期を示しているものであって、豊千が閻丘胤に会った時期を示しているわけではないので、問題はないと思われる。

「貞觀七年」条に寒山等の話を記載する『仏祖統紀』については若干の疑問は残るが、「貞觀十七年」(釈氏稽古略)、後掲『參天台五臺山記』と比較した場合、「七年」の部分の共通性から、あるいは誤伝の可能性も考えられる。

(12) 註(3)参照。

(13) 井上以智為「天台山に於ける道教と仏教」(桑原博士還暦記念東洋史論叢「弘文堂書房、一九三一年」所収)六一―八頁では典拠は示されていないが、『参記』のこの記事を見ているらしい(六四六頁参照)。これ以外、寒山等に関する従来の研究では、この記事は注意されていない。また郁賢皓前掲註(6)書、徐光大前掲註(6)書においても、この記事は採られていない。

(14) 文字は、東福寺蔵本の影印本(東洋文庫叢刊第七『參天台五臺山記』)に拠り、明らかに誤写と思われる文字については、「寒山子詩集序」等によって校訂し、注記した。文字のうち特に問題となるのは、東福寺蔵本では台州刺史の名が閻丘胤ではなく閻丘綰と読めることである。他のいくつかの写本に閻丘胤とするものもあり(平林文雄『參天台五臺山記校本並に研究』(風間書房、一九七八年)二十五頁、島津草子『成尋阿闍梨母集・參天台五臺山記の研究』(大蔵出版、一九五九年)二五九頁、絹と見えるのはおそらく転写の過程で胤字の右側の最後の一画が脱落したものと思われる。なお、『大日本仏教全書』と『史籍集覽』本の『参記』は胤字を採る。

(15) 「寒山子詩集序」は一人称で書かれているが、成尋の引用したものはそうではない。また話の順番や語句、文章等、三史料と比べて若干の違いはあるが、類似性は高い。

(16) 「寒山子詩集序」・「豊千禪師録」・「拾得録」以外で、一〇七二年より早い時期の成立のものは、『宋高僧伝』(九八七年成立)、『景德伝灯録』(一〇〇四年上奏)である。しかしいずれも、『参記』が引用する豊千の詩を取

- めていない上、文章の類似性も低い。「釈氏稽古略」は「貞観十七年」を示すが、一三五四年の成立である。
- (17) 『参記』及び、森克己「参天台五台山記について」、『続日宋貿易の研究』(国書刊行会、一九七五年)所収二九六頁、同、「戒寛の渡宋記について」(同上書所収三〇七頁、藤善真澄「成尋の驚いた彼の典籍」、『仏教史学研究』二二二頁、一九八一年一月)、小野勝年「入唐求法行歴の研究」上(法蔵館、一九八二年)等参照。
- (18) 「裔入宋求法巡礼行並瑞像造立記」(清涼寺釈迦如来像内納入物)、『大日本史料』一一二〇、永観元年八月一日条。
- (19) 検索には、現在刊行されている各種の人名・書名等の索引類を可能な限り利用した。
- (20) 『寒山詩』の成立時期については諸説あるが、概ね唐宋から五代には存在していたとする見解で一致している註(4)所引、諸書諸論文参照。そして寒山説話は、詩の作者を説話化して詩集の成立後に作られたものであることが指摘されている(津田前掲註(3)論文五〇二～五〇四頁、入谷・松村前掲註(3)書五〇〇頁)。また、成尋入宋当時の中国仏教界は禅宗全盛時代にありつつあり、さらに、天台山では道教諸神や神仙化隠逸化せられた僧が礼拝信仰の対象となっていた様子が、指摘されている(塚本善隆「成尋の入宋旅行記に見る日中仏教の消長―天台山の巻―」、『塚本善隆著作集6』(大東出版、一九七四年)所収)。
- (21) この時成尋が手に入れた『寒山詩』は、最も古い『寒山詩』の版本と言われる。一八九九年志南刊のものに先立つこと百余年前のものになり、注目すべきであることが指摘されている(藤善前掲註(17)論文五十六頁)。
- (22) 成尋の家系については、玉井幸助「成尋阿闍梨の家系」(『文学』一一一七、一九四三年七月)を参照。
- (23) 『参記』第八、熙寧六年(延久五年、一〇七三)四月十三日条。なお、藤善前掲註(17)論文五十一～五十三頁参照。
- (24) 註(19)に同じ。
- (25) 例えば、『大正新修大蔵経』目録部・統経疏部・統律疏部・統論疏部・統諸宗部・悉曇部に収められる日本の諸宗の典籍類中に現れる寒山・拾得・豊干等を見ると、鎌倉時代中・後期以降の禅宗の語録等に集中している。禅宗関係以外の事例としては、『寶行鈔』(南北朝時代の律宗の僧照遠(一三〇四?)の著書)事鈔下四之本に「寒山詩序云。(後略)」、「釈摩訶衍論勘注」(鎌倉時代後期の真言宗の僧頼宝(二七九一～一三三〇)の著書)巻八(三之一)に「寒山子云。(後略)」、また「父子相迎」(鎌倉時代後期、南北朝時代の浄土宗の僧向阿証賢(二二六三～一三四五)の著書)上に寒山の名が見える、という三例が確認できる。しかし、いずれも鎌倉末から南北朝期のものである。また説話類において寒山・拾得・豊干が初めて登場するのは、弘安六年(二二八三)成立の、無住道暎の『沙石集』(巻七―二二五・巻九―巻十末―)であり、同じく無住著の『雑談集』(巻八、持律坐禪ノ事)である。
- (26) 津田前掲註(3)論文五〇二～五〇四頁、入谷・松村前掲註(3)書五〇〇頁。
- (27) 津田前掲註(3)論文四八六～四八七頁、前掲註(1)入矢A書八～九頁、前掲註(4)入矢D論文四十六頁、入谷・松村前掲註(3)書七～八・五〇―頁。
- (付記) 小稿は、中央大学大学院、一九九二年度東洋史学演習・一九九三年度日本古代史演習において口頭発表した内容を、補訂成文化したものである。史料の解釈等種々のご教示を賜った石井正敏先生をはじめ、ゼミの諸姉兄に深く謝意を表したい。
- また、成稿にあたりご指導を賜った新田英治先生に厚くお礼申し上げます。